

これからの「新約神学」

川 村 輝 典

I. 問題の所在

1992年7月27日(月)から31日(金)にかけてスペインのマドリドで開催された、第47回国際新約聖書学会の諸行事の中で、私が参加した Seminar Nr. 15 の内容を報告し、それについていささかの論評を加え、今後の新約神学について展望しよう、というのが小文の趣旨である。この第15ゼミナールというのは、この学会の大会において行なわれる主たるプログラムの一つであって、新約聖書に関係ある種々な専門分野に別れて行なわれるゼミナールの中でも比較的最近設けられたもので、その設立の理由としては最近における新約神学をめぐる様々な論議が交わされるようになり、これが重要なテーマとなって来たことが挙げられる。

では、そのような議論はどのような形で起って来たのであろうか。そのことを論ずるに当たっては、さらにその背後にある歴史的経過をも考慮しなければならないであろう。そこで、まず最近の新約神学についての研究の推移を確認しておきたい。

II. 20世紀における新約神学の状況

今世紀初頭において活躍した新約聖書神学者のなかで、今日多くの人々に大きな影響を残している一人として、W. グレーデを挙げることに異存のある人は少ないに違いない。彼の著作のなかで最も重要なものの一つが、『いわゆる新約聖書神学の課題と方法』⁽¹⁾であって、そこで彼が意図したことは、新約聖書神学を徹底的に歴史的な伝承史的尺度によって構想することであっ

た。この書において彼が批判したのは、伝統的な靈感説と正典という概念であった。新約聖書神学の基礎は単に新約諸文書に限られるのではなく、それ以外の全ての原始キリスト教の諸文書でなければならない。それゆえ新約聖書神学は原始キリスト教宗教史として書かれなければならない、というのである。

ヴレーデと共に今日忘れることの出来ない学者としては、今世紀初頭に活躍した A. シュラッターの名が挙げられなければならないであろう。彼は新約神学を構想する場合、聖書を教会との関連で扱うことに重点をおき、そのためにその学問的主張が、無批判的な聖書主義であるとして批判されることすらあったほどである。しかし、彼は歴史的研究の独立性を主張し、それは訓練された厳密な「認知」によって行なわれるべきである、と説いた。また、シュラッターは新約聖書学者であると同時に、教義学者であった⁽²⁾。それゆえ彼は真の歴史的事実を、それに伴う解釈の言葉と解き難く結び付いたものとした。当時、歴史主義の克服に多くの人々が苦しんでいたのに対して啓示の超歴史的性格を強調し、心理主義ないし主観主義に対しては、人間の言葉が聖霊の助けによって神の言葉となり得る、という宗教改革的信仰を主張した⁽³⁾。

しかし、何といっても今世紀最大の新約聖書学者は、R. ブルトマンであると言ってよいであろう。たしかに彼には多くの批判者があり、その主張のキリスト教信仰に対する危険性をうんぬんされることさえあった。日本でも日本基督改革派教会の人々はつい最近まで、いわゆるブルトマン神学は正統的信仰を失わせるものとして危険視していた。しかし、彼の功績は測り知れず、今日ドイツの新約学界で活躍している学者の大部分は彼の弟子であり、いまやその危険性を説く人は誰もいないと言ってよいであろう。ブルトマンの最大の功績は、〈歴史的・学問的な聖書批判と神学的な問題設定とを、感動させる程の仕方で考え抜き、一つにした〉⁽⁴⁾ ことである。

それは別な言い方をすれば、〈人間とその現存在の真の可能性に関する問によってまとめられた徹底的な歴史的批判と、弁証法神学の意味において徹

底化された宗教改革の信仰理解と、言葉理解とが一つになっている⁽⁵⁾ ということである。

周知のようにブルトマンは第一次世界大戦直後の荒廃したヨーロッパの地盤にあって、キリスト教信仰と神学との活性化を願い、K. バルト、E. トゥールナイゼン、F. ゴーガルテンたちと共に「神の言の神学」、または「弁証法的神学」のグループに属して、19世紀以来の自由主義的な神学に対して宗教改革的神学の姿勢を取り戻した人である。一方ではそのような活躍をなしつつ、他方彼は聖書学者として19世紀に一世を風びした感のある宗教史学派的立場に立って、歴史的・批判的研究を推し進めるということを行なったのであった。それが余りにも両極端的な行為であるように見え、多くの人々の誤解や批判を受けることになったが、今日の時点において考えるならば、聖書学と教義学とをどのように折衷させて行くかという、聖書学者にとってはもちろん教義学者にとっても避けて通ることの出来ない問題を、自らにおいて厳しく受け止めた結果であると言えるのではないであろうか。

このブルトマンの陣営の中からやがて、E. ケーゼマンのような優れた新約学者が現れ、師ブルトマンを批判しつつその最も基本的な学問的姿勢を継承し、独自の「新約神学」の立場を打ち立てるのである。ケーゼマンがブルトマンを批判した最大の点は、師がイエスを扱かう際にその歴史性についてはこれを避け、もっぱらその教説のみを問題とし、さらに原始教団の宣べ伝えたケーリュグマのキリストと史的イエスとの間には連続性はない、とした点であった。

しかし、史的イエスと関わりのないケーリュグマなるものとは、いったい何であろうか。それではケーリュグマは初代教会の想像の産物になってしまうのではないか。このような問題に直面して、彼はケーリュグマの背後にさかのぼり、史的イエスとこれとの綿密な結び付きを探究するきっかけを作ったのである⁽⁶⁾。しかし、ケーゼマンは師ブルトマンから遠く離れてしまったわけではない。それどころかある意味では、彼ほど忠実に師の敷いた路線を忠実に歩んでいる者はいない、とさえ言えるのではないであろうか。

その一つのよい例が、後になって新約聖書の正典問題を扱うことになった際の、彼の姿勢である。彼によれば、〈新約の正典はそれ自体としては教会の統一性を基礎づけ〉ず、むしろ〈告白の多様性を基礎づける〉⁽⁷⁾ ののである。

彼の正典についての考えは、一見きわめて自由であるかのような印象を与えるけれども、実はその内面においてははっきりした神学に貫かれているのである。すなわち、これこそが正に彼がブルトマンから受け継いでいる一つの大事な点なのであるが、それはルター派の信仰的立場にほかならない。すなわち彼によれば新約の正典とは罪人の義認の福音であり、従ってこれを強調しているパウロ神学の一局面が正典の規範となるというのである⁽⁸⁾。すなわち、「正典中の正典」(Kanon in Kanon) という主張にほかならない。

「新約神学」というものを扱おうとする場合、必然的に求められることはその統一性であり、どこに聖書の中心 (Mitte der Schrift) を見出すかということである。J. エレミアスは史的イエスをケーリュグマの源、呼び掛け (Ruf) として理解して、イエスの史的再構成を目指すことによりこれに中心をもって行こうということに努めている⁽⁹⁾。また前世紀の J. T. ベック, J. Chr. K. フォン・ホフマンなどの流れに添った O. クルマン, L. ゴッペルトなどの救済史的な方法は、必ずしも今日その影響を大きく残しているとは言い難く、結局ブルトマン＝ケーゼマンの線を受け継ぐ人々から、新しい光が見られようとしている。その第一人者として挙げられるのが、旧約学者としては H. ゲーゼであり、新約学者としてはケーゼマンの弟子である P. シュトウールマッハーであろう。

Ⅲ. 最近における「聖書神学」論の展開

最近におけるこの問題への積極的な提言は、旧約学者の側からなされた。すなわちチュービンゲン大学の旧約神学の教授である H. ゲーゼがその第一声を放ったのである。彼のこの問題に関するいくつかの提言に耳を傾けてみたい。〈人は旧約聖書を新約聖書への歴史的過程の記録として、特に救済史、それも新約聖書によって終結するのみでなく、克服さえされている記録とし

て見る事が出来る〉⁽¹⁰⁾。

〈旧約聖書は新約聖書によって成立する。新約聖書は本質的に統一であり、連続体である伝承過程を終結させる〉⁽¹¹⁾。

〈…キリスト教的旧約神学もユダヤ教的旧約神学もないのであって、ただ旧約聖書の伝承形成を実現させ、そこから、またそこにおいて発展するような旧約聖書の神学というものだけがあるのである。…旧約聖書が新約聖書に対して弁明しなければならないのではなく、むしろ逆に新約聖書が旧約聖書を引き合いに出すのである。新約聖書は旧約聖書の伝承形成に終を告げ、終結に導くのであり、聖書の伝承形成はそれによって全体として完成し、そのことで初めて深い意味において正典的なのである。〉⁽¹²⁾。

〈新約聖書神学すなわちキリスト論は新約聖書の出来事、すなわち救いの突入、終末の実現、神の現在を記述する旧約聖書の神学である。これによって復活の証人、使徒（およびその伝承）はこの出来事を証言するのである。新約聖書はそれ自身では理解出来ないもの (unverständlich) であり、旧約聖書はそれ自身では誤解をあたえるもの (misverständlich) である〉⁽¹³⁾。〈新約聖書以前において完結する旧約聖書はないし、新約聖書以前において完結する啓示もない。むしろ、旧約聖書は長い過程の中で成長し、造り上げられ、結局正典化の過程として把握されることをわれわれは見る。…新約聖書は既成の旧約聖書を引き合いに出すのではなく、目の前にある $\gamma\rho\alpha\phi\eta$ をまとめた部分にしたがって「律法と預言者」（マタイ 5: 17, 7: 12. ルカ 24: 27 も参照）あるいはまた「律法、預言者、詩篇」（ルカ 24: 44）と呼ぶのである。…かくして新約聖書は自ら極致として終に、したがって聖書の伝承形成の目標に立ち、すべての前史、すなわちいわゆる旧約聖書を終らせることによって、およそ初めて旧約聖書それ自身を生み出すのである。われわれは、ただ聖書の伝承の唯一の生成過程に関わるのであって、旧約聖書と新約聖書の区別はこの一つの生成過程において、未だ完結していないもの、まだ目標に達していないものと、目標、終り、目的とが区別され得る限において存在するのである。新約聖書に対して…出来上がった旧約聖書が向かい合うのではな

く、新約聖書に対してただ聖書生成、すなわちそれ自身が属する啓示史が先行するのである〉⁽¹⁴⁾。

このゲーゼによる旧約神学からの接近に対して、新約の側から聖書神学の再構成に熱心なのが、同じくテュービンゲンの P. シュトウールマッハーである。彼の立場を知るために、新約聖書神学という主題に関して述べている言葉をいくつか引用してみたい⁽¹⁵⁾。

〈新約神学なるものを旧約聖書に向って開かれた聖書神学として構想しようという私の提案によって…むしろ新約聖書の本質的な宣教乃至信仰内容の組織的統合が考えられているのである。その統合は、新約聖書の全体的伝統の証人にとって旧約聖書が（その第一世紀の間まだ徹底して「開かれた」形において）聖書であったという事情を考慮していたのである〉。

〈私の提案によって、第二に新約聖書神学というものにとって宗教史的研究や考察方法が放棄されるべきであるとか、放棄することが許されているというようなことが考えられているのではない。現在の新約聖書の研究状況においては、むしろ魅力的であるのは、われわれが正に宗教史的側面の下でさえも新旧約聖書の組み合わせに引き戻され、正にこの組み合わせを新約のテキストの理解にとってかなり効果的にするようにうながされるといことで、このことは最近の 10 年間に起こったのである〉。

IV. 批 判

1. 旧約学者からの批判

H. H. シュミットによれば、今日の聖書神学の構想に関しては少なくとも三つの基本的な問題が存する。第一は旧約聖書と新約聖書相互の関係、第二は釈義と教義学との関係、そして第三は特に史的・批判的聖書解釈の神学的機能の問題であるという。彼は、「創造の神学」というものを主張しているのであるが、ゲーゼの構想の方法論に対しては大体同意を表わしていると言える。すなわち、旧新約聖書相互の関係を一貫する伝承過程として理解する観

点に賛成をする。しかし、同時にゲーゼは旧約聖書の特別にイスラエ尔的な要素が人間一般の思考の前提の変形であるとする立場から、ゲーゼの構想は余りにも矮小化されているとして批判する⁽¹⁶⁾。

2. 新約学者からの批判

ゲーゼとシュトゥールマッハーに対する新約学者たちの批判は数多くあるが、その代表的なものは以下の論文に尽きるといってよいであろう。

H. Hübner, Das Gesetz als elementares Thema einer Biblischen Theologie? in: KuD 22 (1976)

ibid., Biblische Theologie des Neuen Testaments: Eine programatische Skizze in: KuD 27, 1(1981), 2-19.

G. Strecker, Das Problem der Theologie des Neuen Testaments in: Das Problem der Theologie des Neuen Testaments, hrsg. von G. Strecker, WdF. 367, 1975a (1-31, 1ff. (=ibid., Eschaton und Historie. Aufsätze, 1979 [60-290] 260ff.)

ibid., » Biblische Theologie « ? Kritische Bemerkungen zu den Entwürfen von Hartmut Gese und Peter Stuhlmacher in: Kirche. FS für G. Bornkamm, 1980, 425-445.

E. Grässer, Offene Fragen im Umkreis einer Biblischen Theologie. Werner Kümmel zum 75. Geburtstag. ZThK 77 (1980) H. 2, 200-221.

これら三名の学者に共通している点は、シュトゥールマッハーの議論においては1787年にJ. Ph. ガブラーがその著作⁽¹⁷⁾において主張した、教義学と聖書神学との厳密な区別というものが再び崩れてしまっているということにあると言えよう。このガブラーの主張はさらにF. C. バウルによって強化され、新約神学の歴史的 성격が徹底的に考察された⁽¹⁸⁾。さらに18世紀になる

と G. L. バウアーが新約聖書神学を初めて「新約聖書の聖書神学」という名称で記し、学問的基礎において新約の学科と旧約の学科との区別を定めたのである⁽¹⁹⁾。

このような批判に対しては新たに F. Hahn, W. Wink, K. Lehmann, M. Hengel, G. Maier たちから再批判がなされるのであるが、今はその点に触れることはさけ、専らシュトウルマッハーの意見をきくことにしたい⁽²⁰⁾。

彼によれば、かつて歴史的な問題であったものが今日では教會的な問題になっており、当時は「戦闘の呼び掛け」であったものが、今日では「援助への呼び掛け」になっているという。さらに彼は方法論的な問題を取り上げつつ、「伝統に対する対話的意義の形成」ということを考える。その上で、歴史の中で理解とその現実内容とその影響史を取り上げるための準備が必要であるという。

〈旧新両約聖書を解き難く結びつけている伝承過程があり、それは旧約から新約に達し、そこに目標を見出す〉。彼は旧約に向かって開かれた新約神学というものを考え、これ biblisch (聖書的) と呼ぶ。なぜなら、〈旧約聖書は新約聖書のあらゆる本質的な伝承形成の決定的な母胎であるから〉なのである。

彼によれば新約聖書の中心的告白であるローマ 4: 13, 24 とⅡコリント 1: 9, 12 は Sch^emone Esre の第二の祝福に基づいている。また〈宗教史学的主問題は新約聖書、ユダヤ教、旧約聖書がどのように関係するか〉であり、その答えは統一的伝承過程であるという。

グレサーによれば⁽²¹⁾、このシュトウルマッハーのいわゆる後・批判的聖書解釈は非・批判的解釈である(シュトッレッカーも同様に批判する)。なぜ旧約聖書への開放性のみが語られるのか。また旧約聖書のどこに向かって新約聖書は開かれているのか。シュトウルマッハーの引用する K. バルトの意見に対しても、グレサーは疑問を呈している。また歴史学と教義学のこのような混同に対して、新約聖書における歴史的・批判的方法の正当性と必然性を弁護したのは A. シュラッターであるとも述べている。

VI. 今後の方向

1. JBTh の刊行

ハーバードの Paul D. Hanson, ピッツバーグの Ulrich Mauser, オスロの Magne Saeboe たちと関係し, Otfried Hofius, Bernd Janowski, Norbert Lohfink, Hermut Merklein, Werner H. Schmidt, Peter Stuhlmacher その他の人々を編纂者とし, Rudolf Bohren, Frierich Mildenerger, Rudolf Schnackenburg, Horst Seebass, Peter Stuhlmacher, Claus Westermann といった人々を寄稿者として, 1986 年以来 Neukirchener から Jahrbuch für Biblische Theologie という叢書が出版されはじめた。その各巻の題名を掲げるならば以下の通りである。

Band 1. Einheit und Vielfalt Biblischer Theologie	1986.
Band 2. Der eine Gott der beiden Testamente	1987.
Band 3. Zum Problem des biblischen Kanons	1988.
Band 4. » Gesetz « als Thema Biblischer Theologie	1989.
Band 5. Schöpfung und Neuschöpfung	1990.
Band 6. Altes Testament und christlicher Glaube	1991.
Band 7 Volk Gottes, Gemeinde und Gesellschaft	1992.
Band 8. Messianismus (Arbeitstitel)	1993.

このような企画が進められているということ自体, 「聖書神学」の問題がいよいよ現代の問題となっていることを如実に物語っているのではないであろうか。

2. SNTS の中の Seminar Group 14 乃至 15 “Inhalt und Problem einer neutestamentlichen Theologie” について

1984 年以後の開催場所とこの Seminar Group での発題の内容を判明し

ているだけ挙げてみよう。

1984 年度 (於 バーゼル)

U. Mauser, Heis Theos in the New Testament

P. Stuhlmacher, Biblische Theologie als Weg der Erkenntnis
Gottes. Versuch der Eröffnung eines Dialogs mit
Horst Seebass

J. A. Sanders, Old and New Testament in one Biblical Canon.

1988 年度 (於 ケンブリッジ)

F. Neugebauer, Johannes der Täufer zwischen den Testamenten.

P. Pokorny, Jesus im Rahmen einer Theologie des Neuen Testaments

U. Mauser, Die Theologie des Alten Testaments bei Paulus.

1989 年度 (於 ダブリン)

M. Hengel, Johannes, und das Alte Testament.

R. Guelich, Another Look at Mark's Theology

P. Stuhlmacher, Die Mitte der Schrift.

1991 年度 (ベータール)

J. C. Becker, The Old Testament and the Theology of the New Testament

H. C. Kee, Models of Covenant Conception in the New Testament

P. Pokorny, Der alttestamentlich-jüdische Hintergrund der Passions-Geschichte

1992 年度 (マドリード)

昨年夏に行なわれたこの大会に参加したので、発題要旨を掲げよう。

E. Ellis, The Role of the Old Testament in the Creation of
New Testament Theology

要旨: 新約聖書神学はイエスの聖書解釈とともに始まったということが

できる。イエスは旧約、クムラン文書、ラビ文献に見られる釈義的定式という方法とを用い、少なくともヒレルの七つの解釈の規則の内四つを用いた。

パウロによるイエス伝承の使用は、福音書伝承の継承をどのように考えるかによっている。イエスのダニエル解釈とそれに伴う他の主なたとえについてパウロの知識は、A.D. 40 年にはヤコブやペテロの伝道によって建てられた教会で読まれていた可能性によって支持される。

新約の教会の神学形成における旧約の使用は、イエスの伝統的教説に限られず、ローマ、I コリント、ガラテヤ、ヘブル、I, II ペテロ、ユダなどに見られる聖書解釈を含んでいた。

G. Müller, The Septuagint as the Bible of the New Testament Church.

要旨: 旧約聖書の本文に関しては、紀元前 4～2 世紀には二つの部分的に重なり合っている過程の問題であって、今日なされているヘブル語本文に優位性をあたえることは不可能である。ギリシャ語本文の方が古い場合もある。

七十人訳聖書の本文伝承は、イエスの誕生頃の世紀のユダヤ教の聖書の形式についての推測に含まれるであろう。七十人訳聖書は動的な伝承過程の一部として理解されるべきである。

G. Strecker, Erwägungen zur Konzeption einer neutestamentlichen Theologie.

要旨: R. ブルトマン, J. エレミアス, L. ゴッペルト, H. コンツエルマンたちとは異なって、新約聖書の編集史的な神学を意図する。新約の個々の文書は、その個別的な神学的構想によって評価されるべきであって、「新約聖書神学」という概念は正確には新約聖書における諸神学の複合体として言い表わされる。

VII. マドリード以後

以上概観してきたように、今日の新約学界においては、H. ゲーゼ、P. シュトウルマッハー、U. モーザー、E. シュバイツァーたちのように積極的に統一的な新約神学なるものを認め、さらに旧新約全体を包含するような全聖書的神学を構想する人々と、聖書神学はおろか統一的な新約神学という概念すらこれを認めず、ただ個々の文書の神学があるのみとする立場とが、互いに一步も譲ることなく対立している。

たしかに、かつて見られたような教義学と混同されるような聖書神学というものは、われわれもこれを認めることは出来ない。いわゆる救済史的な方法は、たとえ聖書のある部分にその思想をみとめることができたとしても、これを全聖書にアプリオリに適用することは無理であろう。

それでは、シュトウルマッハーたちの提唱している、旧約から新約に至って完成する伝承、旧約に向って開かれた新約神学というような、統一伝承過程による方法は、どのように評価されるのであろうか。この場合、彼がたびたびその統一伝承の内容を変更していることを指摘しなければならないであろう。このことは、彼自身構想が先走りして内実がそれに伴わないという実情を暴露しているのではないか。

その点、シュトレッカー、グレサーたちの態度はきわめて分析的であり、全体的な視野を持つ必要を認めていないかの如くである。そして、現在のところ学界全体の傾向としては、後者の方に分があるように思われる。たしかに、個々の文書の神学的思想の特色を明らかにすることなしに、新約ないし旧約神学というものは成立不可能であることは明らかなことである。ただ、それにも拘らずわれわれは他の文書ではなく、新約また旧約という限られた性格の文書を問題としているのであって、個々の文書の特色を知るためにも全体との関係、特に新約の場合、多くの人々がその研究を試みている旧約の引用の問題、すなわち旧約と新約との関係の問題を無視することができない(ヒュブナーはその点を強調する)。

新約の個々の文書における旧約の引用の問題から、必然的に新約全体における旧約引用が問題となり、そこから今度は新約文書相互の関係が問われざるを得ないであろう。

そのように考えるとき、決してアプリオリにではないけれども、新約研究の目標としての全新約聖書の神学、さらに旧新約聖書全体を貫く神学というものを構想することは、聖書学を志す者の課題なのではないであろうか。それは性急に結論を出すべき性質のものではないかも知れないが、絶えずわれわれの意識のどこかに留めておくことが大事であると思われる。K. ハーカーが言うように⁽²²⁾、それは〈たとえ解決には程遠いにしても、福音主義神学の必然的な期待〉なのである。

註

- (1) W. Wrede, Über Aufgabe und Methode der sogenannten Neutestamentlichen Theologie, 1897.
- (2) 1898~92年、チュービンゲン大学において新約学教授と同時に組織神学の教授をも務めている。また、著作も新約神学関係以外に次のものがある。Das christliche Dogma 1911. Die christliche Ethik 1914.
- (3) A. Schlatter, Die Theologie des Neuen Testaments und die Dogmatik in: Beiträge zur Förderung christlicher Theologie 13, 1909, Heft 2, 7-82 = Zur Theologie des Neuen Testaments und zur Dogmatik, 203-255.
- (4) シュトウールマッハー (斉藤忠資訳)『新訳聖書解釈学』, 日本基督教団出版局 1984年, 273頁。
- (5) シュトウールマッハー, 上掲書 280頁。
- (6) E. Käsemann, Das Problem des historischen Jesus, ZThK 51 (1954) 125-153 = Exegetische Versuche und Besinnungen I, Göttingen 1960, 187-214.
- (7) E. Käsemann, Begründet der neutestamentliche Kanon die Einheit der Kirche? in: Neues Testament als Kanon, 221.
- (8) E. Käsemann, op. cit., 223; Zum Thema des Neuen Testaments, op. cit., 232.
- (9) H. Gese, Erwägungen zur Einheit der Biblischen Theologie in: Vom Sinai zum Zion 1984, 11.
- (10) Gese, op. cit., 14.
- (11) Gese, op. cit., 17.
- (12) Gese, op. cit., 30.
- (13) Gese, Die biblische Schriftverständnis in: Zur biblischen Theologie, 1983, 11f.

- (14) H. H. Schmid, *Unterwegs zu einer neuen Biblischen Theologie? Anfragen an die von H. Gese und P. Stuhlmacher vortragenen Entwürfe Biblischer Theologie* in: K. Haacker u. a., *Biblische Theologie heute. Einführung-Beispiele-Kontroversen*, Neukirchner 1976, 75
- (15) 以下は、P. Stuhlmacher, *Zum Thema: Biblische Theologie des Neuen Testaments*, 1977, 25f. よりの引用。
- (16) H. H. Schmid, *Schöpfung, Gerechtigkeit und Heil*, Zürich 1974.
- (17) J. Ph. Gabler, *Oratio de iusto discrimine theologiae biblicae et dogmaticae, regundisque recte utriusque finibus*, 1787.
- (18) F. Ch. Baur, *Die Tübinger Schule. Sendschreiben an Hase, 1855, 56.*》Die richtige Methode wird doch immer die bleiben, dass man zuerst die Quellen untersucht und dann erst an die in ihnen enthaltene Geschichte geht 《in: H-J. Kraus, *Die Biblische Theologie. Ihre Geschichte und Problematik*, Neukirchener 1970, 145.
- (19) G. L. Bauer, *Die biblische Theologie des Neuen Testaments*, 4 Bände 1800–1802.
- (20) 以下の引用は P. Stuhlmacher, *Schriftauslegung*, 1975, 128–166 参照。
- (21) E. Grässer, *op. cit.*, 208.
- (22) K. Haacker, *Neutestamentliche Wissenschaft. Eine Einführung in Fragestellungen und Methoden*, Wuppertal 1981, 87.